

現代産業社会における人間自己疎外

—— 社会病理学的一問題提起 ——

別 府 芳 雄

は し が き

新しい社会は新しい階級を必要とする。カーらは、新しい社会における「永遠の階級」として経営者支配を想定し、産業社会において「永遠なる階級」すなわち「経営するもの」と「経営されるもの」との対立相克が残るものと想定した。そして「インダストリアリズムのもとでは階級のない社会は発生しえない」と述べた。新しい社会、つまり産業社会は経営者階級社会（バーナム）であり「こんにち誕生している新社会の支配階級は経営者だ」と断定したが、この現代産業社会における人間自己疎外の問題を社会病理学の視点から取り上げて述べてみたいと思う。

cf. Clark Kerr, John T. Dunlop, Frederick Harbison & Charles A. Myers: *Industrialism and Industrial Man*, The Problems of Labor and Management in Economic Growth, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1960.

Clark Kerr, John T. Dunlop, Frederick Harbison & Charles A. Myers, “*Industrialism and World Society*” Harvard Business Review, Vol. 39, No. 1 (January — February, 1961).

Clark Kerr, John T. Dunlop, Frederick H. Harbison, Charles A. Myers: *Der Mensch in der industriellen Gesellschaft*, Europäische Verlagsanstalt, Frankfurt a. M. 1960.

James Burnham: *The Managerial Revolution*; Penguin Books, 1942.

1 永遠なる階級

(1)

かつてバーナム (J. Burnham) は企業における経営者支配の確立を論じ「経営者革命」は資本主義・社会主義に共通の現象とし「経営者階級に特有なイデオロギーの形成¹⁾」を論じた。すなわち、バーナムは「経営者革命の理論は予言してこういう、資本主義社会は『経営者社会』にとってかわられるだろう²⁾」と。事実、所有主と経営者を兼ねていたかつての産業界のキャプテンに代わって、今では、「大企業の経営者が現代資本主義の花形³⁾」となっている。これは「企業経営者のいっそう大きい役割⁴⁾を考えれば当然かも知れないが、カーらは明確に「政治形態がなんであれ (wie immer ihre politische Verfassung sei,) 工業化社会では、高度の技術を有する技術者と熟練度の低い筋肉労働者が必要であり、管理するものと管理されるものが必要である⁵⁾」と附言する。つまり工業化社会は「管理するもの (Führende)」と「管理されるもの (Ausführende)」に分化される社会である。のみならず現代産業社会は、P. F. ドラッカーによれば「飛躍するマネジメントの世界⁶⁾」であって「マネジメントが世界的なものになってきた」社会なのである。

(2)

断っておくが、ここでいう「経営者」とは現代産業社会のなかで経済活動を行っていて、かつその経済活動が少くとも一業種内ではかなりの影響力または支配力をもっているような企業の経営者であり、経営者は「企業体に特有な機関」なのである。たしかに、カーらのいうように「経営者⁷⁾ということは定義することが困難」であり「企業家・経営者・監督者の機能 (die Funktionen von Unternehmern, Managern und Werksleitern) とみなしているものもあれば、特定の間人集団と考えているものもある⁸⁾」が要は「経営者はこれらのものの全部であり、もっと多くのもの⁹⁾」と考え

ねばならぬ。つまり現代産業社会にはどうしても不可欠な高度技術や計画行動を遂行するための技術上の知識・能力・経験などを結合している組織体そのものがそれであって、組織体という一つの構造は、現代産業システムなり、高度技術なり、計画的行動を遂行する生きものなのである。そこには、在来の企業指導者だけではなく、技術者・科学者・セールスマン・広告専門家その他多くの技術的専門的タレントが含まれている。ドラッカーによれば「要するに、その地位のゆえに、あるいは、その知識のゆえに、彼らの日常業務の上において、組織全体の業績や成果に対して、きわめて重要な影響をもちうるような決定を下すことが期待されている管理者、ないしは専門家といった知識労働者を私はここで〈経営者〉とよんでいるのである」¹⁰⁾と述べ「経営者は事業の生命を支配する (life-giving) なダイナミックな存在である」¹¹⁾としている。「たとえば、それが企業であろうと、あるいは政府機関・研究所・病院・大学等であろうと——いかに多くの人が組織全体にとって、きわめて重要な、そしてとり返しのつかないような決定を下さなければならない立場におかれているかという事実は依然として一般にあまり認識されているとはいえない。その特有の知識による権威は、地位による権威と同じく正当で道理にかなったものであることをわれわれは認識しなければならない」¹²⁾のであって、特有の知識による権威 (the authority of knowledge) は道理にかなったもの (as legitimate) として認めねばならぬ。そして彼は経営者とは「産業社会における一つの経済的機関、しかもとくに経済的色彩の強い機関である」¹³⁾と定義している。つまり巨大企業において著るしい資本参加を行っていないすべての高級管理職員 (alle leitenden Angestellten) を含み、いわゆる「専門的経営者」がこれに該当する。そして経営者は「効果的でなければならない」のである。つまり「経営者が機能と人のヒエラルキーであり、一企業内で最高の地位を保持する」¹⁴⁾とすれば、組織の音曲 (der Ton) は通例その最高役員によって奏でられ、そして企業の成功は彼が全ヒエラルキーに精

別府芳雄

力と洞察力をつぎこむかどうか、ないしは愚行や怠惰によって、組織を停滞するままに放置するかどうかにかかっているからなのである。¹⁵⁾

現代産業社会のように、企業活動が大規模化し巨大会社が発現して「株式所有の分散」「不在所有制の発現」「専門的経営者の登場」をみるに及んで「経営者支配 (Managerkontrolle) は藻利らのいう如く「現代資本主義論の第一の問題」¹⁶⁾ となってきたことは事実である。かつ複雑化していく過程においては、企業の経営はそれについての相当の専門的能力・知識・経験を身につけた経営者なくしては経営しえないことは勿論である。西欧文明が存続する限り経営者は社会の基本的・支配的な機関としての働きを続ける。なぜなら「経営者は現代産業社会の必然的な産物であり、現代産業社会がその人的・物的生産資源を託している個々の企業にとって必要不可欠なものであるからである。あるいはまた、経営者は現代西欧社会の根底に横たわる信念を具現したもの」¹⁷⁾ でもあるのだ。

(3)

ところで近代産業のもたらす社会構造の変動過程は「産業化」として捉えられるであろう。すなわち「いわゆる資本主義」も「いわゆる社会主義」もまた「混合体制」も産業化の過程を前進している。それは端的に「われわれは工業社会への巨大な転換の最中にある。世界の人々はいたるところでインダストリアリズムへの行進を行っている」という表現にうかがわれる。ヨーロッパをうろつきもわっているものは、共産主義という怪物ではなく、多くの形態をもって発生しつつある工業化なのである。¹⁸⁾ つまり「資本主義より工業化」(Industrialisierung, nicht Kapitalismus)なのであり、少くとも経営者革命ののちにおいて、すぐれた経営技能の所有者はソ連においても責任ある地位の高い俸給によって酬いられている。ソ連では「こんにち、職業ごとに別の賃金率があって、それは生産への寄与によって決められている。さまざまな利潤分配法があって、生産量が計画数字を越えると分け前が増加する。今日では、これが社会主義的賃金政¹⁹⁾

策とよばれ、平等主義的思想は共産主義者のあいだでは、非常に悪い言葉になっているプチブル的²⁰⁾という名称さえ与えられている始末である。つまり、平等主義ではなく「経営者」は高い報酬によって酬いられているのである。ユーゴスラビアなどの経営者の報酬は著るしく高額なことは山田²¹⁾らの論ずる如くである。インテリゲンチヤ・技術専門家階級・官僚などの状態は多くの点で労働者や農民の状態と違っている。バーナムは、「経営者の配分上の優遇は政治経済機構上の身分を条件として、経営者にあたえられ……経験がすでにしめすところによれば、配分上のこの優遇はもっぱら貨幣形式をとることを要しない。すなわち、支配者の名目上の貨幣収入はひくいかもしれない。けれども、自動車・住宅・衣食いろいろの贅沢等『国家への奉仕』に対して直接みとめられている特権がある。問題になるのは優先配分のこの事実であって、どんなかたちをとっているかでも、どんな手段でおこなわれているかでもない²²⁾」という。つまり、こんにちの経営者は株式もしくは生産手段の所有によってではなく、みずからの経営能力によってその地歩を占め、その手腕を発揮しているのであって「社会構造全体のなかで管理業務にたずさわる人が占める重要性²³⁾」はますます大きくなり「経営者は多くの重要性と決定的な役割」をもち、「主導権は大部分、経営者の手に集中」されてしまうのであり、経営者は高度の「威信」すらうける。かくて「経営者は産業社会に固有な指導的立場にあるグループ²⁴⁾」をなす。つまり、「インダストリアリズムのもとでは、階級のない社会は発生しえない。労働者は束縛からけっして解放されない (Niemals werden die Arbeiter vom Zwang befreit) 労働者は職場につながれた『鎖 (Ketten)』²⁵⁾を解くことはない」のであって、新しい階級・新しい支配者が必ず生まれてくる。それは「永遠なる階級」(die unvelmeidlichen Klassen)であり所有者支配 (Eigentümerkontrolle) の時代から「経営者支配」(Managerkontrolle) の時代へ——つまり従来の支配階級から新しい権力エリートへと「パターンの変化」がみられる、と同時にそれは新

別府 芳雄

しい人間疎外を生む。そして、それは「力をもった1グループの支配」(ドラッカー)社会なのである。また、この現象たるや「いわゆる資本主義」独得のものではなく、両体制に共通した確乎たる現実である。この点、音田は「先進資本主義国(西欧と日本)と先進社会主義国(ソ連)はともに先進工業社会であるという点において、政治体制の相違にかかわらず労働関係の類似性を生み出しつつあるのではないか²⁶⁾」と指摘しているが、ソ連においては企業の経営者は組合によって選任されず国家によって任命されている。組合によって選任されていないという点では、ソ連の経営者の地位は資本主義の非所有・経営者の地位と酷似している。1920年代にはソ連の農民の多くは木の鋤で土地を耕やしていたのに、1950年代には、ソ連は核工場の発達で世界の指導者となっているのである。バーナムはロシアについては「完全な国家所有の経済下では、優先的配分は資本主義下におけると同一方式ではおこなうことができないだろう……経営者の支配階級はかくて世代から世代へと (from generation to generation) いつまでかつづく²⁷⁾」と論じたが、この場合にソビエトでは「産業は国家が承認した賞罰制度を背景にした軍隊類似のもの」であって官僚的な管理者とかれらの「疎外された精神」が国を支配しているのであって、官僚的な管理者支配が「世代から世代へと」いつまで続くのである。そして「労働者は束縛から、けっして解放されない。労働者は職場につながれた『鎖』を解くことはない」のである。ミルズはスターリン主義は「おそろべきテンポで工業化と近代化とをおこなうという長期的な政策決定を土台として²⁸⁾いる」と述べ、「理論としては、それは、もっともらしい説明のつぎはぎ細工 (coherent patchwork)²⁹⁾」であり、社会の全エネルギーを工業化に向けて組織することができたが、それは「孤立し、内外の敵や仮想敵におびやかされている一後進国を急速に工業化するための手段³⁰⁾」であったと説明している。わが国はどうか。わが国でも工業化の発展とともに経営の専門職業化 (professionalization of management) が現われ、急速な発展をみせ

ている。わが国の工業化は西欧とも全体主義とも異なる「第3のパターン」³¹⁾を示したが、ドラッカーによれば、わが国は「世界の5指のなかにはいる工業国の一つ」³²⁾にはいっている「産業化」の前進国であり「世界の工業国家としてあまりに重要で、また動的な役割を果たすようになった」³³⁾前進国なのである。そして、どの国の工業化も多くの同じ特徴を示している。その「中心的特徴の一つは、工業人口を経営者と管理されるもの (Manager und Abhängige) とに不可避的にかつ永遠に分離する」³⁴⁾ことなのである。

(4)

ところで専門職業化とは雇用者が企業経営することに他ならないから、従来の所有型経営者 (owning entrepreneurs) の後退を意味する。所有主は企業に関する一連の「権利と期待」をあらわす一枚の紙 (証券) をもつものにすぎなくなっている。ガルブレイスは「株主の支配力は絵に描いたモチ」にすぎないと述べたが、アメリカの場合、パールとミーンズの実証的な報告はこの事実を確認している。「法人組織では、産業上の富の《所有者》は、ただ所有権の象徴をもっているだけだが、かつて所有権の不可欠の部分だった権力責任および財産は支配力をもつ別の集団に転移しつつある」と述べたのち「1930年ごろの200の大会社のうち、私的所有権や多数所有権が支配権をもっているものはタッタ6%であって、残り94%は経営者による支配が行われている」³⁵⁾という。つまり資本をもたない機能者の支配 (die kontrolle durch kapitallose Funktionäre) が典型的な支配関係なのである。バーナムによれば「過去数十年間に生産手段の事実上の支配はたえず、いよいよひろく資本家の手を脱していつている。このことはよくはっきりと証明する。社会が資本主義から移動し去りつつあることと資本家が支配階級たる身分をうしないつつあることを。世界経済のいよいよひろい諸部門にわたって現実の経営者は資本家ブルジョアジーではなくなっている。あるいは、きわめて最少限度にいつても、資本家の経営者たる特権は次第次第にきりとられている。そして、この過程が完成する

別府芳雄

ことは、資本家が経済支配から排除されること、すなわち、支配階級たるかれらの没落を意味する³⁶⁾」と。つまりバーナムは資本家は経済支配から排除されて支配階級の座から没落するのだと極論したのである。産業化の進展は組織を拡大する。執行業務は複雑化する。経営は専門職業化する。執行職能が優位する傾向は、かくして当然の帰結である。バーナムは「それは社会支配のために、権力と特権とのために支配階級の地位のために、経営者の集団または階級のおこなう一つの推進だ。この推進は成功するだろう。経営者はその支配を生産手段に対して実施し、生産物の配分上の優位をしめるだろう³⁷⁾」という。つまり経営者階級の社会支配のための推進が成功するに違いないと断定して「はっきりと新支配階級へとうつりゆくだろう。ここにわれわれはあたらしい見地から経営者革命の機構をしるのだ³⁸⁾」とのべ「経営者社会は一個の階級社会だ。強者と弱者と特権者と被圧迫者と支配者と被支配者とのある一個の社会だ³⁹⁾」と結論する。経営者階級による社会支配はいよいよ推進しつづける。経営管理にたずさわる人々の重要性はますます大きくなるのであって「低開発諸国の工業化（発展）が障害されているのは、資本以上に不足している経営者なのだ⁴⁰⁾」といわれるのは当然といわねばならない。

(5)

もし前に述べたように、両体制が次第に同質化し、かつこの産業化の傾向が存続していくものとすれば、資本主義の運命や社会主義の必然あるいはイデオロギーの終焉は論じられているが、この「産業化」には果して終焉があるであろうか。カーらは国家の役割は産業化の進行とともに、むしろ増大され、かつ強化され「永遠なる階級」として経営上、「管理するもの」と「管理されるもの」との構造的な区別が残るであろうと力説しているが、もしこの産業社会が将来のわれわれの永遠の宿命としよう。バーナムのいう通り「世代から世代へといつまでか続く」ものとしよう。「工業

化という巨人が無敵で不死」であると仮定しよう。そしてその場合、カーラのいう「永遠なる階級」として「経営するもの」と「経営されるもの」との構造的な「永遠なる階級」が残るものと仮定しよう。つまり業績によって獲得された地位 (achieved status) が厳然として残り、与えられた地位 (ascribed status) は消失することになるが、いい換えれば、社会的地位を「獲得したもの」と「獲得しえなかったもの」として分ち、かつその階級は残るということになる。繰返していう。新しい階級が「永遠なる階級」として登場してきている。そして、それは「経営者階級」なのであり、いまわれわれは経営者社会を迎えているのである。換言すればバーリー (A. A. Berle) のいう「資本家のいない資本主義」というべき社会が展開しているのである。社会全体が同質的に組織されずに、階級的に分立し、少数の「経営者」が政治的・経済的に支配する階級となり多数者は「経営されるもの」としてとどまる。ただしこの場合に、いかなる利害関係が経営者を資本主義体制に結びつけているのか、つまり「経営者の支配する企業において、なお依然として利潤動機 (Gewinmotiv) が経済活動の最高の基準 (oberste Richtlinie) としての、その意義を喪失することが全くないのはなぜであるか、一体経営者は実際に新しい社会階級の中核体をなすものなのであるか⁴¹⁾」というような問題を秘めているが小論では触れない。この現代産業社会における人間疎外を社会病理学の側面においてのみ取り上げるのが小論の目的である。

- 1) James Burnham: *The Managerial Revolution*, Penguin Books, 1942, p. 170ff.

このなかで、バーナムは The general basis of the managerial ideologies is clear enough from an understandings of the general character of managerial society. と述べている。

- 2) *ibid.*, p. 38.
- 3) Wright Mills: *White Collar*, The American Middle Class, New York Oxford University Press, 1951, p. 100.

別府 芳雄

- 4) Clark Kerr, John T. Dunlop, Frederick H. Harbison, Charles, A. Myers : *Der Mensch in der industriellen Gesellschaft*, Europäische Verlagsanstalt, 1960, S. 39.
- 5) *ibid.*, S. 41.
- 6) P. F. ドラッカー『明日を經營するもの』日本事務能率協会, 1960年 147 頁
- 7) Clark Kerr u. a. S. 161.
- 8) *ibid.*, S. 161.
- 9) *ibid.*, S. 161.
- 10) Peter F. Drucker : *The Effective Executive*, William Heinemann Ltd, 1967, p. 7.
- 11) Peter F. Drucker : *The Practice of Management*, Harper & Brothers Publishers, New York, 1961, p. 3.
- 12) Drucker, *Executive*. p. 7.
- 13) Drucker, *Practice*, p. 8.
- 14) Clark Kerr u. a. S. 162.
- 15) *ibid.*, S. 162.
- 16) 藻利重隆「企業の経営者支配と資本主義体制」(『一橋論叢』第59巻第6号, 日本評論社, 21頁)
- 17) Drucker : *Management*, p. 4.
- 18) Clark Kerr u. a. S. 24.
「産業化」も「工業化」も英語の「インダストリアリゼーション」に相当する。生産施設の機械化や近代化によって生産力を高め, 等質的な物質を大量生産する方式の普及の度合をさすのであって「工業化」といっても産業分類上の「工業」だけの比率を大きくするだけではない。
- 19) Clark Kerr u. a. S. 37.
- 20) Jan Tinbergen : *Lesson from the Past*, Elsevier Publishing Company, Amsterdam—London—New York, p. 27.
- 21) 山田春夫「ユーゴスラヴィアの試みと歩み」(『自由』第10巻, 第5号, 自由社, 148頁以下)
- 22) Burnham. pp. 117—118
- 23) Mills, *White Collar*, p. 77.
- 24) Drucker, *Practice*, p. 3.
- 25) Clark kerr u. a. S. 40.
- 26) 音田正己「先進工業社会における労使関係」(『社会思想研究』1965, 第17巻,

- 10号, 社会思想研究会, 12~13頁)
- 27) Burnham, p. 118ff.
- 28) Wright Mills: *The Marxists*, Penguin Books Ltd, Harmondsworth, Middlesex, England, 1962, p. 141.
- 29) *ibid.*, p. 141.
- 30) *ibid.*, p. 141.
- 31) James C. Abegglen, *The Japanese Factory: Aspects of Its Social Organization*, Glenoe, III: Free Press, 1958, pp. 1—2, 134—135.
- 32) ドラッカー『明日を經營するもの』(前掲) 172頁さらにドラッカーは中国やインドがいかに成長をすすめても今世紀中には日本の生活水準に追いつきえないと断言していることは注意すべきである。
- 33) 同書 8 頁
- 34) Clark kerr u. a. S. 22.
- 35) A. A. Berle and G. C. Means: *The Mordern Corporation and Private Property*, The Macmillian Company, New York, 1940, pp. 66ff.
- 36) Burnham, p. 98.
- 37) *ibid.*, p. 74.
- 38) *ibid.*, p. 93.
- 39) *ibid.*, p. 130.
- 40) Murray D. Bryce: *Industrial Development*—— A Guide for Accelerating Economic Growtn —— McGraw Hill Book Company, Inc. New York, Toronto London, 1960, p. 158.
- 41) H. Pross: *Manger und Aktionäre in Deutschland*, Untersuchungen zum Verhältniss von Eigentum und Verfügungsmacht, Frankfurt. a. Main. 1965, SS. 41—42.

2 人間自己疎外——われわれは正気か——

(1)

「現代産業社会」「永遠なる階級社会」(unvermeidliche Gesellschaft)のなかの人間の状況を考えてみよう「いかなる企業においても, 経営者は他と区別される地位をもった少数者であり, それはちようど, いかなる軍隊¹⁾においても将校団が明確に他と区別される階級であるのと同様の社会で

ある。そして「経営者階級に近づきうるのは、少数のものにすぎない」²⁾ような社会である。この社会のなかにおける人間の自己疎外を考えてみよう。カーらによれば「工業化は広大な都市地域をつくりだし、人口の大きな爆発的增加を可能ならしめ、生活と余暇に新しい水準をつくりだし、社会的・技術的に新しい熟練を導きだし、成長の成功にとって不可欠とされる複雑な相互に関連する任務のなかに入人を導きいれたり強制したりするための広大な規則のしくみを必要ならしめ、組織力の新しい中心をうみだし、また古い中心とくに国家の権限をもっと集中させ、この権力を取得し保持する新しい方法をつくりあげ、人びとを新しい従属の鎖に結びつけ、そしてこれらの鎖の環のおのおのに摩擦をまねき、多くの、かついろいろな既存の文化を漸進的に制圧するような、大衆好みと大衆消費に基盤おおく新しい文化を提供する。それは大きな転換——成功する、すべてを包括する逆行しない転換である。この転換にとって中心となるのは、経営者と管理されるものの関係である」³⁾という。つまり産業化のもたらす「新しき社会的・技術的可能性」(neue soziale und technische Möglichkeiten)は「組織力の新しい中心」「新しい従属の鎖」をつくる。つまり新しい支配の関係(neue Herrschaftsverhältnisse)を作り、そして結果的には既存の文化を漸進的に排除(verdrängen)してゆく文化を招来する。フロムの説明によると、フロイトにとっては「人間は本質的に反社会的なもの」⁴⁾である。フロイトは抑圧から文化的行動へというエネルギーの変化を昇華(Sublimation)と名付けたことは周知の如くであるが、「もし抑圧の度合が昇華の限界以上に達すると個人は神経症になり、抑圧を減らすことが必要となる」⁵⁾としたが、この仮説を「新しい階級社会」の「社会的・技術的可能性」の問題に応用して考えてみよう。もし産業化を近代化の一側面と考えるなら、産業化は「社会的・技術的」進歩を伴う。「近代的工業文明(die moderne-industrielle Zivilisation)はその技術的進歩(technische Entwicklung)と知的飛躍(intellektuelle Aufschwung)の形

⁶⁾態」であり、そしてこの社会はカーラにいわせると、「一つの永遠の斗争が世界を特徴づけるが、それは、あらゆるヒエラルキーの線を上下している経営者と管理されるもの・すべての間のもの」⁷⁾であるという。社会を刻印 (prägen) するものは「経営者」と「管理されるもの」の間のものである。「衝動の満足と文化とは逆比例する。抑圧がつよいほど、より多くの文化が生まれる（そしてまた神経症的障碍の危険もより多くなる）」⁸⁾ものだが、その社会は「静かなしばしば絶望的な小紛争が社会の全面でたたかわされる」社会となり、経営するものと管理されるものとの問題が「未来においても同じように世界を特徴づける (Weltgeschichte einwirken)」⁹⁾社会である。この社会の社会病理が問題となるであろう。いいかえれば、この「現実主義」の社会病理を追跡するわけであるが、フロムによれば、現代人は「現実主義」どころか驚くほど、現実主義の「欠如」を示していると指摘して現代人が「現実主義だと自慢したら、精神医学者は、それを病める頭にとまなう症状で、むしろ重い症状だと考える」¹⁰⁾と述べて、現実主義などということは精神病の重篤な症状 (serious symptom) だと極論する。現代人は「生と死の意味・幸福と苦悩・感情と重大な思想にたいする現実主義の欠如」¹¹⁾を示しているのではないかという。つまり現代人は人間存在の現実のすべてを蔽い隠し、それを偽りの現実という人工的な美化された光景でおきかえているのであって、ぴかぴか光るガラス玉をもらって土地や自由を失ってしまった野蕃人と大して異るところはない。つまり「現実の背後にあるものはなにか、現在かくあるのはなぜか、これからどうなっていくのかということをつねてみようと言えない」¹²⁾という。現代人は「社会的技術的可能性」というピカピカ光るガラス玉 (glittering glass beads) を貰って喜んでいるが、その背後にあるものをみな失っているのだ。この社会に住む人間ばかりじゃない。「社会そのもの」もまた狂っている。社会ぜんたいが病気になることもあるということは、フロイトによって明確に『文明とその不満』(Civilization and Its Discontent)

のなかで論ぜられていることはいうまでもないが、現代産業社会¹³⁾じたいが頭を病んだ社会である。それでは「狂気の社会」の人間の状況、つまり「狂気の社会」のなかの「われわれは正気か」を先ず考えてみよう。

(2)

現代産業社会を特色づけている「巨大な生産力と技術的な合理性」にもとづく大量生産方式を考えてみよう。大企業・官庁・病院・大学などは管理組織をもち、かつて「所有経営者が果していた機能を新しい管理組織が代行¹⁴⁾」している。つまり特定の目的達成のための手段として合理的に形成された人為的集団の組織をもつことになる。大橋らは「産業化・官僚制化と社会病理¹⁵⁾」と題して「産業化とアノミー」と「官僚制化と社会病理」（非人間化）と述べており、たしかに大橋らのいうように、これらは現代産業社会の精神病理現象であって「社会生理でなく、社会病理」であることはいうまでもないが、ただし大橋らは、現代産業社会そのものは、「社会のはたらきをしている限り正常」で「社会ぜんたいが精神の健康を欠いている」とは考えていない。実は社会も、その社会に住む人間も共に精神の健康を欠いており、両者は互に感応し合って病状を悪化しているようである。現代産業社会の「経営するもの」と「管理される人びと」にみられる病態生理のような非情性・「氷のような非情性」を考えてみよう。いうまでもないが「経営するもの」もまた疎外された人びとであり、「途方にくれた不安な個人」であり、かれの「自我をささえる他の要素といえ、名声と権力¹⁶⁾」しかない。名声 (prestige) と権力 (power) を後楯とするより他はない。「経営するもの」はあたかも機械を「雇う」ように人間を「雇う」のであり「経営するもの」と「管理されるもの」の関係は「どちらも目的にたいする手段の関係で、どちらもたがいに道具となっている¹⁷⁾」のであり、どちらも道具的 (instrumental) 関係である。工業化の非情性は「経営するもの」と「管理されるもの」の相互不信 (das gegenseitige

Misstrauen) をまねき、企業・組織・合理的計算の抑圧 (Zange) のなかにおいて、相互に「もの」として対決する。「最も能率的な社会組織のタイプ」すなわち、大規模組織体 (large-scale, complex, formal organization) は現代の人間と社会に何をもたらしただか。大規模組織体のなかで働く人びとは「内から胚胎する膠着した官僚制によって支配¹⁸⁾」されよう。かつてバルザックは官僚主義を評して小人の行使する巨大な力 (the gaint power wielded by pygmies) と述べたが、比喩からして病的な印象を与える。この官僚化の傾向は「私的資本主義的大経営の発達のうち¹⁹⁾に、周知の典型的な形で現われる」ものでありウェーバーの表現によれば、「諸企業はそれ自身が厳格な官僚的組織の無比の見本 (unerreichte Muster) だ²⁰⁾」という。そして、それは物的経営手段の集中化と提携してすすむものである「職位が順位であり、中心であって、それぞれの順位に人間が割当てられるという非人間化を本質的特徴」とするのであって、田中の軽妙な比喩によれば「すべての毛穴をふさぐ恐ろしい寄生体²¹⁾」のようなものだというのが、大組織体のあらゆる毛穴を閉ざして、それぞれの毛穴には人間が組みこまれ、全体との関連も相互の関連もなく「彼のもつ力の源泉は彼個人ではなく彼の職務であり、彼は企業内の階層組織にきっちりと組みこまれているから、企業内の他の人との個人的な人間関係を形成する余地はきわめて少ない²²⁾」のであり、インパーソナルなヒエラルキー的構造によって組み込まれる。そして管理は働く人びとの隅々にゆきわたり、すべての働く人びとは「管理する人」の指揮にしたがい、機械の歯車の如くに行動することを要求される。「経営するもの」は大きい歯車であり、「管理されるもの」は無意味な歯車であるにせよ、歯車はいつも自分の外にあるものに奉仕する手段である。働く人びとは要するに「踏み車²³⁾」(treadmill) か「鼠競走」(rat race) の立場におかれた「ゆがんだ存在」にすぎない。この場合、働く人びとの同輩に対する心理は「すべての心の奥底には競争心が巣くっていて敵意にみちた空々しいもの」であり、働く

人びとは「果しない恐怖にみちた世界に放りだされた異邦人」²⁴⁾にすぎないのであって「実際に機械を動かすもの」の思考は眠り、独想的思考は喪失する。現代産業人は思考を要しないし思考から逃避される。思考能力を休閑 (brach liegen) してしまう。現代人は思考から逃避の途上にある (auf der Flucht vor dem Denken) のだ。「齒車」は思考を要しない。働く人びとはつねに規則正しく用心ぶかく、たえず与えられた専門的業務を忠実になしとげるように訓練される。「休まず、おくれず働かず」「憤激なく偏頗なく」(“sine ira ac studio”) という官僚主義の下においては、規則を遵守するという義務責仕だけが重要視されて、本来の組織目標は忘れられてゆく。目的合理的であるようにみえて極めて非合理的側面が見過される。まさにウェーバーが捉えたように「およそいかなる合理化も、それが極端に進めば必然的宿命として非合理性を生む」²⁵⁾ものなのである。「生活のこのような普遍合理化の結果として全面的な相互依存の体系《隷従》の《鉄のように堅い殻》がつくられ、人間が悉く《器具化》し、各人は経済なり、科学なりの、その都度決定的な力となる《経営》の中にはめこまれて逃げようがなくなる」²⁶⁾のであり、隷従の鉄のように堅い殻 (stahlhartes Gehäuse) の前に逃れようもない「生きた機械は死んだ機械と協同して隷従の殻をつくる」(ウェーバー) のであり、「技術への新しい隷属は」多様性と個別性への新しい献身をもたらしかもしれない。これは同時に二つの方向をみる分裂人格を永遠につくる……新しい隷属と新しい自由が手を取りあって進むのである」²⁷⁾つまり個人の人格は永遠に分裂する。新しい隷属 (neue Sklaverei) と新しい自由 (neue Freiheit) が共存する。永遠の分裂人格のみならず個人は無力さを意識する。そして人びとは官僚制化された現代産業機構のなかで全く没个性的に即物化された対象となる。ウェーバーのいう通り「官僚制が非人間化されればされるほど (je mehr sie sich “entmenscht”, je vollkommener) また公務の処理にあたって愛憎やあらゆる純個人的な一般に計算できないいっさいの非合理的

な感情的要素を排除すること——官僚制固有の特性」²⁸⁾なのであり、氷のような「非情性」は管理者の心的態度となる。組織が働く人びとから次第に人間性を奪って、そのうえに「管理するもの」への権力が集中されるとき「経営するもの」の「たえがたい孤独感からの逃避」はみずからの権力を駆使して「管理されるもの」に対するサディズム的傾向 (sadistic drives) となる。「官僚制組織がそれで自由にする者の手中にある技術的に最高度に発達した権力手段であり」²⁹⁾もっとも高度に完成された権力手段 (das technisch höchstentwickelte Machtmittel) である以上、ピラミッドの頂点にあって「管理するもの」にとっては多数の「管理されるもの」は部分的存在として、意のままに操縦される「もの」にすぎない。人間がいつでも「交換可能なもの」である限り、管理されるものは次第に「訓練された無能力者」(ヴェヴレン) と化す。心理的にいえば内的な疲労とあきらめ」が管理されるものの心理的特徴であり³⁰⁾「劣等感と無力感・個人の無意味さの感情」であり「外がわの力に、他の人びとに、制度によりかかろうとする」ものを作り上げる。現代人は産業化を与えられ「キャンディを貰った子供のように喜んだ」が孤独をえた。個人は不安と無力さを意識する。この孤独は耐えがたいものであり、フロムは「極度の孤独感がある限度をこすと精神分裂病的な障害のように狂気の状態となる」³¹⁾と述べたが、狂った状態を現出するのみならず「精神的な孤独」を抱いた群衆となる。働く人びとはもはや「瓦礫の山」(Sandhaufen) のような人間の寄せ集めにすぎず、フロムが警告したように「人間機械の絶望がファシズムの政治的目的を育てる豊かな土壌」³²⁾とすれば、この瓦礫の山のような「豊かな土壌」には「強者にたいするマゾヒズム的傾向」が育ち、ファシズムに同調する機械的反応さえ示すであろう。「量化」と「抽象化」をぬきにしては、現代の大規模生産は想像もつかぬにせよ、現代産業社会は「量化と抽象化の過程が経済的生産の領域をこえて物・人および自分じしんにたいする人間の態度までに拡がった」³³⁾社会であり、そして「個々の人間の生活や

別府 芳雄

思想の十分な育成・精神というものになじみ、精神に関心を払う能力・反省し熟慮し相互に批判的であり、かつ責任をわかち合う人間たちの最高度の緊張と対立の中に、理性的なものを歴史的に発見する能力³⁴⁾」こういう実質そのものが溶解し、その核心において脅かされている社会だといわねばならない。そして抽象化され量化された人間は「自分じしんを例外者として経験する。人間が自分じしんから遠ざかってしまった³⁵⁾」という感情をもつ。つまり das denkende, d. h. sinnende wesen ではない。

(3)

ヴェブレンは「産業と経済との間の不可避的矛盾³⁶⁾」の存在を説いて「産業の機械化は視野のせまい機械的思考方法を要求」するとして、経済社会の進化は、それ自身をほろぼすばかりでなく、あらゆる文明をほろぼすことを危惧したのであるが、この「視野のせまい機械的思考」が現代産業社会に及ぼす結果を考えてみよう。科学的機械的思考は次々に現われてきて、とどまることもなく意味到思にいたることはない。もともと管理組織はデモクラシーのための制度でありながら、実は反デモクラシー的専制的傾向となり、働く人びとを拘束・抑圧する。この抑圧に対する反応形式は「神経症的現象に比較できる社会心理学的現象たとえば社会集団における破壊的サディズム的衝動³⁷⁾」となる。この破壊的・サディズム的衝動は「抑圧に対する動的な衝動」の一つの反応形式なのだ。また仕事の細分化は従業員の仕事への興味を削減して「非能率と非人格」をもたらし、人間的主体性の喪失となる。産業化に必須なテクノロジーの発展は、人間の自然に対する征服であったが、それはまた、ますます自然から離れてゆくことでもある。また現代産業社会が超人的な力によって決定され、ひいては人間の運命までがテクノロジーによって決定されることでもある。そして「働く人びと」をして自分自身であることも、他の人間ないし事物と創造的な総合において生きること³⁸⁾もどちらでもないようにし「自分で思考することも行動することもできない」ようにする。いずれにせよ「いかに生きべき

³⁹⁾かを知らない」人間を作り出す。テクノロジーのもとにおいて「働く人び
 との魂は依然として奴隷の⁴⁰⁾状態」にある。そして「いたるところに苦悩が
 あり、精神病患者が増加し、全体主義と独裁主義の前に民主主義は⁴¹⁾退潮」
 している。のみならず、組織の巨大化と官僚制の階層的構造は底辺の人び
 とから「どうでもいい」というアパシーと逃避的態度すら生む。というの
 は「従業員たちは、ほとんど話す必要のない場所にいる制服の⁴²⁾一群」にす
 ぎないからである。経済的な関係ばかりでなく、制服の一群 (uniform
 mass) の人間的関係もまた「このそらぞらしい性格」をもつ。それは人
 間的存在の関係ではなく、物と物との関係である。しかし、この手段と疎
 隔の精神のもっとも重要な、もっとも荒廃した例は、人間の自分自身にた
 いする関係であり「人間はたんに商品売るばかりでなく、自分自身をあ
 たかも商品のように⁴³⁾感じている」のであって、現代産業社会はミルズのい
 う「人格市場」を現出せしめる。かくして出現するものは「職業的精神異
 常」(デューイ)のような病的人間であろう。「働く人びと」はただ抽象
 的な一般性をもつにすぎず、人間と人間とを繋ぐものは、この一般性だけ
 であって、そしてこの資格をもつ限りにおいてのみ人間は相互に自由に代
 替可能なのである。人間が管理組織の員数である限り、「歯車意識」をも
 ち、量と化した人びとから「働きたい」を求めることは至難であり、勤労
 意欲を喪失した人びとに高い生産制を期待することはもとより不可能であ
 ろう。のみならず上昇期資本主義においては産業人は、職業への精励が強
 烈な義務意識と禁欲的で規律正しい組織的な生活態度つまり「世俗内的禁
 欲」(innerweltliche Askese)「救済の証は各人の現世における職業的精
 励」「職業聖召観」をもっていたが、現代産業社会において「経営するも
 の」は利潤追求それみずからが目的であって精神的背景がない。つまり
 「管理されるもの」のなかから次期の「経営するもの」の育成は企業経営
 の本質ではない。かくて「職業的精神異常」と「訓練された無能力者」の
 なかから、企業の意志決定に任ずべき「経営するもの」は育成できない。

別府芳雄

最も民主的であるべき管理経営はもっとも非民主主義的傾向を孕み政治意識においても民主主義は空洞化する。そして「絶望的な小紛争」は各所で起っているではないか。これこそ、働く「もの」にすぎなくなった人間、つまり「人間の尊厳」を認識しえない現代産業社会の病的側面である。器具化され即物化された人間は他人をも「もの」としてしかみることができないからである。

- 1) Clark Kerr u. a. S. 169.
- 2) *ibid.*, S. 148
- 3) *ibid.*, S. 315.
- 4) Erich Fromm: *The Fear of Freedom*, Routledge & Kegan Paul LTD, London, 1942, p. 7.
- 5) *ibid.*, p. 7.
- 6) Clark Kerr u. a. S. 314.
- 7) *ibid.*, S. 350.
- 8) Fromm, *The Fear of Freedom*, p. 7.
- 9) Clark Kerr u. a. S. 350.
- 10) Erich Fromm: *The Sane Society*, Holt, Rinehart and Winston, 1955, p. 170.
- 11) *ibid.*, p. 171.
- 12) *ibid.*, p. 171.
- 13) *ibid.*, p. 19.
- 14) Mills: *White Collar*, p. 66.
- 15) 大橋薫・大藪寿一著『社会病理学』誠信書房, 昭和41年, 213頁
- 16) Fromm, *The Fear of Freedom*, p. 104.
- 17) *ibid.*, p. 102.
- 18) William H. Whyte, JR. : *The Organization Man*, Doubleday Anchor Books, Doubleday Company, INC. Garden City, New York, 1956, p. 182.
- 19) Max Weber: *Wirtschaft und Gesellschaft*, Grundriss der verstehenden Soziologie, J. C. B. Mohr (Paul Siebeck) Tübingen, Zweiter Halbband, 1956, S. 574.
- 20) *ibid.*, S. 570.
- 21) 田中清助「人間疎外の社会的基盤」(政治過程) (『講座・近代思想史』(Ⅶ))

弘文堂. 昭和34年, 46頁)

- 22) Mills, *White Collar*, p. 92.
- 23) Whyte, *Organization Man*, p. 4.
- 24) Fromm, *The Fear of Freedom*, p. 53.
- 25) Karl Löwith: *Gesammelte Abhandlungen*, Zur Kritik der geschichtlichen Existenz, W. Kohlhammer Verlag, 1960, S. 19.
- 26) *ibid.*, S. 21.
- 27) *ibid.*, S. 350.
- 28) Max Weber, *Wirtschaft und Gesellschaft*. S. 571.
- 29) *ibid.*, S. 580.
- 30) Fromm, *The Fear of Freedom*, p. 181.
- 31) *ibid.*, s. 15.
- 32) *Ibid.*, p. 221.
- 33) Fromm, *Sane Society*, p. 113.
- 34) Karl Jaspers: *Vom Ursprung und Ziel der Geschichte*, R. Piper & Co. Verlag, München, 1949, S. 167.
- 35) Fromm, *The Sane Society*, p. 120.
- 36) Thorstein Veblen: *The Theory of Business Enterprise*, New York, Scribner, 1932, p. 234.
- 37) Fromm, *The Fear of Freedom*, p. 12.
- 38) Mathilde Niel: *The Phenomenon of Technology: Liberation or Alienation of Man?* (Socialist Humanism, an international Symposium edited by Erich Fromm. Allen Lane, The Penguin Press London, 1967, p. 310.)
- 39) *ibid.*, p. 310.
- 40) *ibid.*, p. 318.
- 41) *ibid.*, p. 313.
- 42) Mills, *White Collar*, p. 209.
- 43) Fromm, *The Fear of Freedom*, p. 103.

別府芳雄

結 び

以上小論において、現代産業社会の社会生理学を論じ、ついで人間疎外の現況を社会病理学の視点から述べた。さらにこの狂気の社会のなかの「われわれは正気か」を検討し、この産業化が「前進しつづける」とき、また「現代人は思考から逃避している」といわれるとき、われわれはもう一度狂気の社会における人間存在を反省してみる必要はないか。

(助教授・精神病理学専攻・医博)

——亡き青木得三先生にささぐ——